

や やるぞ～ ま まけないぞ～ が がんばろうぜ～ た 楽しい学校になるように

天国に捧げる *Row and Row!*

～「カッコいい」シリーズ ①～

昨年度は、全校生徒の皆さんに、「ものごとをいろんな方向や立場や価値観から観ることのできる『眼』と『心』を養って、本質を見抜くことのできる人間になってほしい」と一貫して訴えてきました。

実は、これとは別に、私が教師になって子どもたちに繰り返し言い続けてきた、もっと大括りの、人としてめざしてほしい理想の姿があります。それは「『カッコいい』人間になってほしい、『カッコいい』生き方をしてほしい」とうことです。『カッコいい』という表現は、日常的によく使われていますが、具体的にどんな意味？と言われると、明確に説明するのが困難な、漠然とした難しい概念です。また、対象が同じであっても、人それぞれに、『カッコいい』『カッコ悪い』と正反対の評価に分かれる場合も往々にしてあります。

『カッコいい』は、正体不明で、百面相のような不思議な言葉でもあります。

今号から連作で3号にわたって、私が選んだ『カッコいい』をテーマにした内容をお届けします。私が考える『カッコいい』人間、『カッコいい』生き方についての本質に迫ります。子どもたちの生き方の参考になれば。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

休日に新潟市のやすらぎ堤を散歩していると、信濃川の水面を滑るようにボートが進んでいく。市内の高校ボート部の漕艇練習のようだ。オールを動かす4人の漕ぎ手のリズムがピッタリ合っていて、見ているこちらの気持ちも心地良くなる。昭和大橋、八千代橋、萬代橋の下をくぐり、ボートはどこまでもどこまでも真っ直ぐ進んで、そのまま日本海という大海まで漕ぎ出すような勢いだ。ボートの流れに連動する水しぶきが清涼感をもたらしてくれる。

銀行勤務時の同期入社で、特に親しかった仲間、慶応大学のボート部出身のAとBの二人がいた。二人とも「エイト」という8人の漕ぎ手とコックスという舵手からなるボート競技の、大学ボート界の花形選手だった。

AはBの1年先輩だが、事情があって卒業が1年遅れたため、二人は同じ会社への同期入社となった。Aは無口で控えめで謙虚でクールガイのイケメン。そして一年後輩のBは、一個人のボート選手としての実力はAより上で、オリンピック候補選手にもなったほど。強靱の体力と精神力の持ち主で、常に冗談を言って周囲を笑わせてくれる陽気なタフガイ。

静と動、月と太陽、タイプは違えど、青春の全てをボートにかけ日々寝食を共にし、互いを認め合い敬慕し合う凸凹コンビの人間関係は、とても微笑ましく、周囲から見ても羨ましくも妬ましくもあった。

そして、特におしゃべりなBの口から、折に触れてボートや大学時代に関するいろいろな話を聞くことは、実に楽しかった。

30年以上も前のことなので、具体的なことはもうほとんど忘れてしまったが、特に印象に残って覚えているのは、「ボートって、遊びで漕いでると、まるで空を飛んでるように夢心地のように気持ちがいいけど、競技として勝負かけて漕ぐと死ぬほどつらく苦しいんだよ。」ということだった。

ボートに限らず他の競技も同じようなことは言えるのだろうが、遊びと真剣勝負との体力及びメンタルの格差が半端ないのがボート。そして、漕ぎ手の人数が最も多い「エイト」は、究極のチームスポーツだとのことだった。

そして、もう一つ忘れられない話が、BがAのいない時にこっそり自分に教えてくれた。Aにまつわる伝説的なエピソードだった。

彼らが在学中一番の目標にしていた大学選手権当日、あと数時間後の決勝を控え、みんなでまとまってアップをしたり、様々な最終チェックをするなど、レースに向けモチベーションを上げようと余念がない中、事件は起きた。

Aの姿がどこにも見当たらない。消えたのだ。会場のどこを探してもいない。レギュラーメンバーであるAの失踪。誰もが信じられない思いだった。手分けしてもう一度みんなで探す。どこにもいない。レース開始まで時間がない。奴がいなければ勝てないのに。

レース時間が間近に迫った頃、Aがひょっこりと現れた。「ごめん、大事な忘れ物があって家まで取りに行っていた。」とだけぼそっとつぶやいて、一人でアップを開始した。ドタバタして彼を探し回っていた連中が、口々に小言を言い始めた。「こんな大事な大会で忘れ物?」「緊張感無さ過ぎだろう」「何で黙っていなくなるんだ」「チームワークが全てなのに何で和を乱すようなことを」「他のメンバーに代わってもらおうか」「こんな気分じゃ勝てない」

大会本部の仕事を終えてチームに合流しに戻ってきたマネージャーが、その場の澁んだ雰囲気を感じて察知した。そしていざ出陣という時に、意を決したようにマネージャーが重い口を開いた。

「Aには絶対にみんなに言わないでくれと頼まれてたんだけど。」「Aの親父さんが危篤だって連絡がきて、病気だか事故だかは知らないけど、急死らしい。家に着いた時には既に息を引き取っていたって。」「あいつの今の精神状態、半端じゃないよ。」「俺が話したことは黙っていてね。」みんなの動きが一瞬固まった。そして、レース終了まで、誰もが口を開くことはなかった。

レースが始まった。結果は、会心のレースでチームは大学日本一。ゴールした瞬間、みんなが号泣した。いやAだけがいつもと変わらぬクールな表情。

「自分も号泣しましたよ。優勝したから泣いたんじゃないって、誰もが勝ちたいと思っていたから。A先輩のために。みんなの心に火がついた忘れられない最高のレースだった。レース後もA先輩から父親の死について語られることは一切なかった。まるで何事もなかったように、いつもと変わらぬ沈着冷静なA先輩だった。あの人は僕らにとっての伝説の先輩なんですよ。」

♪ エンヤコラ今夜も舟を出す Row and Row, Row and Row
振り返るな Row Row ♪ (『黒の舟歌』より)